

研究・調査報告書

報告書番号	担当
440	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and atherosclerotic burden in the proximal thoracic aorta. 胸部大動脈近位部における飲酒と動脈硬化的負荷	
執筆者	
Kohsaka S, Jin Z, Rundek T, Homma S, Sacco RL, Di Tullio MR.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Atherosclerosis. 2011 Dec;219(2):794-8.	
キーワード	
大動脈、動脈硬化、脳卒中、飲酒、危険因子	
要 旨	
目的： 飲酒と虚血性脳卒中や大動脈における動脈硬化との関連は明らかではないが、適度な飲酒は脳卒中を予防するとされる。脳卒中リスクの増加と関連する大動脈プラーク(AAP)と飲酒の関連を、一般住民を対象とした横断研究において評価する。	
方法： 対象は NINDS-funded Aortic Plaques and Risk of Ischemic Stroke (APRIS)研究の一部である 55 歳以上の 464 人 (平均年齢 69.1±9.0 歳、男性 251 人、女性 213 人) とし、初回虚血性脳卒中患者群 255 人と脳卒中のないコントロール群 209 人に分けた。AAP の検出は経食道心エコーを施行した。質問票を用いて飲酒量について、1 群：無から少量(1 ヶ月に 1drink 未満)、2 群：軽量から中等量(1 ヶ月に 1drink から 1 日 2drink まで)、3 群：大量(1 日 2drink 以上)に分類した。多変量調整ロジスティック回帰分析にて飲酒量と AAP に対するオッズ比(OR)及び 95%信頼区間(CI)を算出し、危険因子 (年齢、性、高血圧、糖尿病、脂質異常症、喫煙) で調整した。	
結果： AAP は 326 人(70.4%)で検出され、174 人(37.6%)は脳卒中の危険が増大する AAP4 mm 以上であった。飲酒量は 1 群 241 人(53.2%)、2 群 177 人(39.0%)であったが、2 群該当者数はコントロール群に比べ、脳卒中患者群で少なく(35.5%vs60.3%、 $p<0.001$)、AAP(+)の人数も少なかった(41.6%vs58.8%、 $p=0.008$)。既知の動脈硬化の危険因子で調整後も飲酒量は AAP と逆相関(OR0.61;95%CI0.37-0.98、 $p=0.042$)した。用量反応解析では 2 群のみが AAP を有するリスク(調整 OR0.45;95%CI0.29-0.68)および 4 mm 以上の AAP を有するリスク(調整 OR0.51;95%CI0.34-0.77)が小さかった。	
結論： 軽量から中等量の飲酒は動脈弓近位部における動脈硬化的負荷が低い。適度な飲酒者において虚血性脳卒中のリスクが低いことを支持する可能性がある。	